

小豆島の地域産業を学ぶための事前学習 (第 1 報)

—主にオリーブ関連産業と醤油醸造業について—

香川 貴志^{*1}

Preliminary Study on Local Industry on Shodoshima Island (Part 1): Olive Related Industries and Soy Sauce Brewing

Takashi KAGAWA

抄 録：本稿は、2024（令和 6）年度前期集中開講科目「地理学特講」（学部）、および現地授業を合同実施する大学院前期開講科目「社会科教育実践演習-地理-」における事前学習の成果の一部を整理したものである。本誌投稿規程の 1 論文あたり頁数の上限のため、本論文は第 1 報と第 2 報からなる。これら 2 編の論文は、主に事前学習で受講生と筆者が分担した、訪問地に関わる文献の要旨から構成される。今年度は離島という特殊な条件のもと、観光業にとどまらず、とくに食品工業が発達した小豆島に現地授業のフィールドを定めた。このうち本稿（第 1 報）には、筑波大学人文地理学研究室が 2022 年度に実施した地域調査の成果、オリーブ関連産業と醤油醸造業に関わる文献要旨が格納されている。また、本稿続編（第 2 報：香川、2025a）には、素麺製造業、製塩業、交通および観光、その他の産業全般、そして小豆島のイメージを表象する壺井栄『二十四の瞳』を扱った文献の要旨が収められている。紙幅の都合により、事前学習で扱った地形図読図演習については、本誌掲載の別稿（香川、2025b）にまとめている。

キーワード：離島、食品産業、事前学習、文献精読、文献要旨、小豆島

I. 京都教育大学における野外授業を伴う地理学科目での事前学習の位置付け

本学学生の大多数は初等中等教育の教員を志す。こうした学生たちに社会科や地理歴史科における地理的素養を身につけさせるには座学だけでは不十分で、講義室や文献で学んだことを現地に赴いてフィールドで学び、それを定着させることが望まれる。とくに 2025 年 4 月入学者を迎えるまでは、2022 年度から導入された高等学校地理歴史科の必修科目「地理総合」を学んだ学生はいない。また、社会領域専攻の学生といえども高校時代に「地理 A」または「地理 B」（以下では両科目をまとめて「地理」と記す）を学んだ学生は多くない。それゆえ、現地での見聞が上質な地理授業のためには必要不可欠であると筆者は考えている。

ただ、仮にデスクワークによる「訪問地域を知る取組」が脆弱であれば、現地授業で得られる成果は小さくなる。本授業科目は、本来の授業料の他に交通費や宿泊費を要するだけに、一般的な講義以上にコストパフォーマンスの良さを受講生に感じてもらえるための工夫が求められる。

そこで本授業科目および姉妹科目の「地理学研究」（奇数年開講）では、事前学習において文献精読とその要旨の執筆、そしてキーワードの提案を課している。2013 年実施以降については、大学院開講科目も含めて、文献精読の成果を文献要旨集にまとめ、論文として残してきた。過去 3 年のものを示すと、出雲・石見・長門地方に関するもの（香川、2022a；2022b）、丹後半島と舞鶴に関するもの（香川、2023a；2023b）、三陸地方のジオパークと被災地に関するもの（香川、2024a；2024b）となる。

これ以前の実施記録は割愛するが、上記のうち三陸地方については従前に 2 回の授業実施歴があり、その事前学習で扱った文献の要旨が上記の諸論文の付録に準ずる様式で整理されている（香川、2013；2018a；2018b）。

^{*1} 京都教育大学教育学部

文献収集の要諦は、受講生自らが訪問地域に関する文献をCiNiiやNDL-OPACで検索するところから始める方法にある。しかし、本授業科目の受講生は、過半数が3回生（一部には2回生や4回生が含まれる）であり、今年度もその例に漏れないばかりか香川（2025b）に記したように「地理学を専門とする学生」が受講生に含まれていない異例の陣容となった。さらに卒業論文に取り組む以前の学部学生は、文献検索能力が未発達であることが多いため、文献検索から始めさせると作業効率が大幅に低下する。

そこで筆者は、前年度のシラバス執筆時点から不断に訪問地域に関する文献情報の収集に励み、それを第1回事前学習会の直前まで継続した。こうして収集した文献情報を整理して第1回事前学習会で文献分担表（後掲の表1）と各文献の書誌情報とを受講生に配布し、各自が担当する文献グループ（年度によって異なるが一人あたり5～8本の文献）を受講生間で相談して選んでもらうことにした。

Ⅱ. 第1回・第2回事前学習会—授業概要の説明、文献グループ設定と担当者の決定— （2024年4月27日（土）、12:00～15:10）

本授業科目は前期開講の2単位科目なので、計15コマ（30時間）の授業実施を要する。現地授業は経費負担や教育実習日程（8月末～）を考慮すれば、前泊を含む3泊4日が精一杯である。つまり現地は10コマ（20時間）がほぼ上限となる。各回の事前学習会の内容はほぼ固定されており、第1回と第2回では授業概要の説明と文献グループ毎の担当者の決定に費やすことが多い。

この時点では現地授業の細部が確定していない。そのため、授業概要の説明はシラバス記載事項の再確認が中心となる。また、文献グループの設定は、次の条件を可能な限り満足できるよう配慮して、筆者が第1回事前学習会に先立って済ませておいた。

- ①各受講生は原則として各事項・各訪問地の文献を少なくとも1編は担当する。
- ②1本の文献を可能な限り複数の受講生で担当する。
- ③受講生間の担当文献の総ページ数に関する多寡を極力抑制する。
- ④受講生が担当する文献はIR（機関リポジトリ）やDOI経由で無償ダウンロードできるものに限る。

上記の各条件の設定理由を①～④に対応させて記すと次のとおりである。

- ①全員が各訪問地域に関する何らかの知識を持てるようにする。
- ②キャンセルのリスク回避に加えて、成績評価に有効な比較資料として活用できる。
- ③受講生間における負担の軽重が生じないようにする。
- ④附属図書館を通じての文献取寄せが手数と費用を要することに加え、過去には文献入手が遅れて課題提出の遅延をきたすケースが何度もあった。

今年度の場合、文献1件のみ受講生1名と香川の2名で担当することになったケースが生じたものの、上記の条件①～④はすべて達成できた。結果、受講生が担当する文献のページ数は106～109ページ、筆者が担当する文献の総ページ数は515ページに落ち着いた。

第1回事前学習会当日の夜、作業シートを教務システム経由で受講生に送達した。この作業シートは、本稿と続編（香川、2025a）の付録に掲載している文献要旨集のうち、全文献の書誌情報（Reference）のすべて、Key WordsとAbstract（いずれも英単語のタイトルのみを記載）からなる。受講生には自身の担当する文献について精読の後、キーワードと要旨を入力してから不要な部分を削除した作業シートをEメール添付で期日までに提出するよう指示した。

作業の際、作業シートの1行あたり文字数や行間設定、フォントの変更はしないよう指示した。仕上がりの形状は、作業シート上でキーワードが2行以上に及ばないこと、要旨は行数に過不足が生じないよう必ず5行でまとめることを要件とした（本稿の付録では書式の関係で6行）。これは、受講生が教職に就いた際、字数や行数の制限が強い「学級だより」や「学校だより」などの執筆をすることに備えた鍛錬の場と位置づけたものである。

もちろん当該作業は、卒業論文や修了論文を執筆する際に研究目的の著述で不可欠な「研究系譜の振り返り」にも活用できる。

締切期日は7月17日(水)の23:59とした。これは、課題提出が得られたのちに、筆者が文献要旨の推敲作業(成績評価を兼ねて実施)を徹底して行うためである。第3回・第4回事前学習会(7月6日)までのインターバルを長く設定したのは、この間に教育実習に関わる諸行事が設定されていること、落ち着いて文献精読に取り組めるよう配慮したこと、そして第3回・第4回事前学習会での締切日時リマインドのためである。

また、ここ数年の経験から、文献要旨を提出する際のファイル様式とファイル名称を指定した。それは、推敲作業に配慮してのWordファイルでの提出、ファイルを整理する利便性を考えてのファイル名称(学籍番号・氏名・ファイル内容を表現したもの)の固定である。昨年度は要件を守れない受講生も散見されたが、今年度は全員が提出条件をクリアできた。

Ⅲ. 第3回・第4回事前学習会—主に『二十四の瞳』鑑賞会と地形図読図演習—

(2024年7月6日(土)、12:00～15:10)

この事前学習会では、現地機関との調整結果を盛り込んで、可能な限り具体的な時程も入れた行程表を配布のうえ説明した。

続いて木下恵介監督・高峰秀子主演の『二十四の瞳』の鑑賞を行った。この映画はモノクロ作品ながら、それが戦中戦後の情景を一層鮮やかに感じさせてくれる名作で、鑑賞会の後で涙ぐむ受講生も多くみられた。映画に出てくる景観も山の形状や内海湾の様子が現在まで殆ど変化しておらず、受講生たちは映画に描かれた画像に色が着いた情景と現地で再会することになる。反戦小説・反戦映画ともいわれる『二十四の瞳』は、個々人の政治思想や教育思想の違いはさておき、教え子への慈愛が各所で滲出した作品である。作品鑑賞後に書いてもらった感想文を読むと、教員を志す受講生の多くが強く心を揺さぶられたようである。小豆島訪問への期待が高まったことを語る感想文も多くみられたため、今回の映画鑑賞会は大成功であったと思われる。

『二十四の瞳』は、上映時間が約2時間半におよぶ大作である。しかし、これだけでは2コマ分の時間を満たすことはできない。そこで、残りの約30分を活用して地形図読図の模擬問題に取り組んでもらった。その詳細は、紙幅の関係で香川(2025b)に譲るが、今年度の読図問題は解答時間に配慮して3つの設問のうち純粋な読図問題を「模擬問題1」だけにした。第3回・第4回事前学習会では「模擬問題1」だけを課して、「模擬問題2」と「同3」は、第5回事前学習会の折に提出する宿題とした。この2つの設問は、地形図読図から派生的に作成した形式(香川, 2025b)であり、同様の形式は大学入学共通テストや教員採用試験でも頻出している。筆者は地図帳やWebサイトなどの資料を参照しながら解答する方法こそが、知識・技能の幅を広げるのに有効と考えたため、「模擬問題2」と「同3」は当初より宿題にすることを前提に作問した。

表 1 文献精読のための分担割り振り

番号	所蔵	頁数	香川	M 01	M 02	M 03	M 04	M 05	F 01	F 02	F 03	F 04	F 05	F 06	F 07	F 08	F 09
Ts01	I	9		●						●						●	
Ts02	I	16			●						●						●
Ts03	I	12				●						●					
Ts04	I	16					●						●				
Ts05	I	13						●						●			
Ts06	I	7							●						●		
Ov01	R	5	◇														
Ov02	R	9	◇														
Ov03	R	8	◇														
Ov04	N	4	◇														
Ov05	R	7	◇														
Ov06	L	9		●						●							
Ov07	R	12	◇														
Ov08	R	4	◇														
Ov09	R	6	◇														
Ov10	W	17				●			●							●	
Ov11	I	11				●							●				
Ov12	W	7			●			●						●			
Ov13	W	8			●							●				●	
Ov14	W	8					●					●					
Ov15	W	8								●	●						●
Sv01	I	16								●						●	
Sv02	W	44	◇						Ke								
Sv03	W	6			●		●		Abstract	●		●					
Sv04	W	4							●						●		●
Sv05	W	5				●		●				●		●			
Sv06	R	7	◇														
Sv07	W	17	◇	●													
Sv08	W	21	◇														
Sm01	W	26	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★
Sm02	W	8	◇														
Ps01	R	18	◇														
Ps02	I	18	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★
Tr01	W	10		●						●						●	
Tr02	R	15	◇														
Tr03	W	18				●		●									
Tr04	R	8	◇														
Tr05	W	5	◇														
Tr06	R	12	◇														
Tr07	N	7	◇														
Tr08	W	16					●				●						
Tr09	W	12										●	●				
Tr10	W	10							●						●		●
Tr11	W	7	◇														
Tr12	W	17			●									●			

表1 文献精読のための分担割り振り (つづき)

番号	所蔵	頁数	香川	M01	M02	M03	M04	M05	F01	F02	F03	F04	F05	F06	F07	F08	F09
In01	W	4	◇														
In02	I	20	◇														
In03	N	19	◇														
In04	W	9	◇														
In05	I	22	◇														
In06	I	5		●				●		●						●	
In07	R	5	◇														
In08	W	14					●		●			●		●	●		●
In09	W	6			●	●					●		●				
In10	R	4	◇														
In11	I	72	◇														
Nj01	I	11			●	●	●		●		●		●	●	●		●
Nj02	L	14		●				●		●		●				●	
Nj03	R	5	◇														
Nj04	N	7	◇														
Nj05	I	4	◇														
Nj06	R	5	◇														
Nj07	R	16	◇														
Nj08	R	23	◇														
Nj09	R	17	◇														
Nj10	R	8	◇														
Nj11	R	7	◇														
担 当 頁 数				5	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
				1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
				5	8	8	7	9	6	7	7	7	9	9	8	7	6

表中の凡例(左右の両頁で共通)

Mは男子学生(大学院学生を含む), Fは女子学生を示す。

【文献番号】

Ts:『筑波大学人文地理学研究』第41号(2023)所収文献, Ov: オリーブ,

Sy: 醤油, Sm: 素麺, Ps: 製塩・塩, Tr: 交通・観光, In: 産業・農業

Nj:『二十四の瞳』

【(文献の) 所蔵】

I 機関リポジトリ(下のWと同様にWeb経由で入手可能)

W DOI, J-StageなどのWeb経由で入手可能

N 国立国会図書館(NDL)デジタルコレクション

L 附属図書館または地理学演習室

R 他機関所蔵のため取寄せ(Web公開無し)

【各々の文献の入手方法】

★ 全員が入手・担当する文献

● 各自が入手・担当する文献

◇ 香川が入手・担当する文献

Ⅳ. 第5回事前学習会—最終確認、『文献要旨集』とフィールドノートの配布—

(2024年7月28日(日)、12:00～13:30)

第5回事前学習会は、教職大学院の7月入学試験が7月27日(土)に実施されたため、7月28日(日)に日程変更した。この日程変更が生じる可能性については、第1回～第4回事前学習会の際に受講生へ不断に伝えるとともに、教務システムでも通知して連絡徹底を図った。

ここでは、現地機関と重ねてきた協議を踏まえて最終決定した現地授業の時程などを示し、既出の表1のように分担した文献要旨を簡易製本した『文献要旨集』および「現地授業におけるフィールドワークで見聞事項をメモするためのフィールドノート」を配布した。

まず『文献要旨集』は、下見(2024年3月8～10日)の際に撮影した写真を表紙に配置し、可視的に現地授業への期待が高まるように工夫した。本稿および続編(香川, 2025a)に付録として掲載した文献要旨は、全67編の文献を格納し16ページに及ぶ。現地への理解を事前に深くしておくため、筆者は数年前から文献要旨集を活用した宿題を受講生に課している。それは「自身が担当した文献を除外して各訪問地・事項のカテゴリーから読んでみたい文献とその理由を簡潔に記す」というものである。この宿題は、現地集合の際に出席確認を兼ねて集め、内容を熟読して成績評価の資料とするため、真剣に『文献要旨集』と対峙することになる。さらに、すべての要旨を読まないという宿題をこなせないのも、読解力と執筆技術(分かりやすい要旨を書くコツ)の育成を図りながら現地への多面的な理解が可能となる。また、要旨集の読後に選択理由を整理する作業を通じて、文章表現力の鍛錬も期待できる。ただし、素麺製造業と製塩業に関しては、各々2編の文献しかなかったため、この課題の対象にはしなかった。

時間的な制約があるので、現地授業では見聞できる情報量が必然的に限定される。こうした難点を克服する手段として『文献要旨集』を存分に活用した事前学習は、現段階では最も優れた授業手法の一つではないかと筆者は考えている。

以下には引用・参考文献(付録で扱ったものは割愛)に続けて、付録として要旨(筑波大学人文地理学研究室が2022年度に実施した地域調査の成果、オリーブ関連産業、醤油醸造業)を掲載している。また、本稿の続編(香川, 2025a)には、本稿に収録できなかった文献要旨(素麺製造業、製塩業、交通および観光、産業一般・農業、壺井栄『二十四の瞳』を扱った文献)を付録として掲載している。本稿と併せて参照のうえ、小豆島を訪問する際の礎石として活用いただければ幸いである。

謝辞

本稿と姉妹編の第2報(香川: 2025a)の執筆に際し、文献収集では山陽学園大学非常勤講師の今井英文氏、京都教育大学附属図書館の職員の皆様に多大なお力添えをいただきました。末筆ながら記して御礼申し上げます。なお、本研究で紹介した授業実践方法については、2024年8月25日に名古屋学院大学で開催された2024年度日本地理教育学会大会において発表しました。

引用・参考文献(本稿付録および香川(2025a)付録に掲載した計67編の文献は割愛)

香川貴志(2013)東日本大震災を受けての防災教育普及の取組—さまざまな論考の整理と三陸地域での現地検証—。『京都教育大学紀要』, 123, pp. 31-45.

香川貴志(2018a)三陸被災地で防災・減災教育を学ぶ—その事前学習における文献研究—(第1報)。『京都教育大学環境教育研究年報』, 26, pp. 25-37.

香川貴志(2018b)三陸被災地で防災・減災教育を学ぶ—その事前学習における文献研究—(第2報)。『京都教育大学環境教育研究年報』, 26, pp. 39-46.

香川貴志(2022a)出雲大社、石見銀山、萩と津和野を巡るための文献研究の記録(第1報)

—最近刊行された対象地域の地理学関連文献の要旨—。『京都教育大学環境教育研究年報』, 30, pp. 57-72.

香川貴志 (2022b) 出雲大社, 石見銀山, 萩と津和野を巡るための文献研究の記録 (第2報)

—最近刊行された対象地域の地理学関連文献の要旨—. 『京都教育大学環境教育研究年報』, 30, pp. 73-86.

香川貴志 (2023a) 「海の京都」を巡るための文献研究の記録 (第1報) —丹後半島全般, 京都丹後鉄道, 与謝野町—. 『京都教育大学環境教育研究年報』, 31, pp. 39-53.

香川貴志 (2023b) 「海の京都」を巡るための文献研究の記録 (第2報) —舞鶴市, 宮津市, 京丹後市, 伊根町—. 『京都教育大学環境教育研究年報』, 31, pp. 55-69.

香川貴志 (2024a) 津波被害からの復興を学ぶための事前学習 (第1報) —三陸ジオパーク, 石巻市大川小学校跡, 南三陸町—. 『京都教育大学環境教育研究年報』, 32, pp. 33-45.

香川貴志 (2024b) 津波被害からの復興を学ぶための事前学習 (第2報) —陸前高田市, 釜石市, 大槌町, 山田町, 宮古市田老—. 『京都教育大学環境教育研究年報』, 32, pp. 47-58.

香川貴志 (2025a) 小豆島の地域産業を学ぶための事前学習 (第2報) —素麺製造業, 製塩業, 交通および観光, 産業一般・農業, 壺井栄『二十四の瞳』について—. 『京都教育大学環境教育研究年報』, 33, pp. 51-60.

香川貴志 (2025b). 「二十八の瞳」が巡った小豆島での産業学習—2024 (令和6) 年度「地理学特講」「社会科教育実践演習-地理-」(大学院) の覚え書き—. 『京都教育大学環境教育研究年報』, 33, pp. 61-74.

付録 (事前学習で扱った文献の要旨)

受講生が要旨執筆とキーワード選定を担当する文献は, 経済的な負担を避けるため, 他大学等から取寄せる必要があるものは避け, 本学所蔵資料, DOIやIR (機関リポジトリ) 等のWebサイト経由で無償ダウンロードできるものに限った。なお, すべての文献要旨とキーワードは, 香川による推敲を経ている。また, 各文献のコード番号に添えたアルファベットは, 文献入手に関わる情報であり, 次のような意味を持っている。Web: DOIやJ-STAGEを経由して入手可, IR:機関リポジトリで入手可 (CiNiiではWeb入手不可能と表示される場合があり, こうしたケースでは各大学のWebサイトから入手できることもある), Lb: 本学附属図書館または地理学研究室で所蔵, NDL: 国立国会図書館デジタルコレクション, Re: 附属図書館経由で他大学等から取寄せ。

★組版の関係により, Key Wordsの一部が複数の行, Abstractの多くが6行で表記されている。

『筑波大学人文地理学研究』第41号, 2023に収録された文献を掲載ページ順にすべて掲出した。

▼ Ts01 IR,9p.

Reference: 王 倚竹・坂本優紀・付 凱林・川添 航・薄井 晴・鈴木修斗・中山 玲・劉 逸飛・綾田泰之・杉谷大樹・松井圭介 (2023). アートイベントを通じた地域活性化が住民に与える影響—瀬戸内国際芸術祭 2022 を事例に—. 筑波大学人文地理学研究, 41, 1-9.

Key Words: アートイベント, 住民参加, 地域活性化, 瀬戸内国際芸術祭, 小豆島

Abstract: 本研究は, 瀬戸内国際芸術祭を題材として, 小豆島における住民の芸術祭への参加実態を把握し, 芸術祭が地域住民にもたらす影響の解明を目的としている。結果, 芸術祭の開催によって, 多くの人が小豆島を訪れるようになり, 当地のイメージアップや地域住民にとって新たな交流の機会が創出される良い影響の一方, ゴミの不法投棄や私有地への立ち入りなど, 地域住民に損益を及ぼす課題 (いわゆるオーバーツーリズムの一種) が生じていることも判明した。芸術祭と住民が直接的に繋がる場の創出を図っていくことが今後の課題である。

▼ Ts02 IR,16p.

Reference: 中山 玲・川添 航・鈴木修斗・薄井 晴・坂本優紀・王 倚竹・付 凱林・劉 逸飛・綾田泰之・杉谷大樹・松井圭介 (2023). 小豆島におけるオリーブ産業の存続要因. 筑波大学人文地理学研究, 41, 11-26.

Key Words: 小豆島, オリーブ産業, オリーブ, 構造改革特区, 農業参入

Key Words: 小豆島, オリーブ産業, オリーブ, 構造改革特区, 農業参入

Abstract: 小豆島のオリーブ産業は100余年の歴史を持つ。その存続要因として, まず小豆島の気候がオリーブの栽培に適

していることを指摘できる。小豆島の温暖少雨な気候は、オリーブ栽培の本場である地中海地域の気候に似ている。小豆島でのオリーブ栽培地が南向きの傾斜地にあることも栽培には好都合だった。栽培自体が比較的簡単であることは、小豆島内で多く人々が栽培へ参入する契機となった。オリーブ栽培の研究を行う研究機関が古くから設置され、オリーブハマチの養殖に代表される関連産業の成長もオリーブ栽培を促した要因である。

▼ Ts03 IR,12p.

Reference : 付 凱林・川添 航・王 倚竹・中山 玲・鈴木修斗・薄井 晴・坂本優紀・劉 逸飛・綾田泰之・杉谷大樹・松井圭介 (2023). 離島における観光資源化の展開と特性—小豆島醬の郷を事例に—. 筑波大学人文地理学研究, 41, 27-38.

Key Words : 観光資源化, 島嶼観光, 地場産業, 醬の郷, 小豆島

Abstract : 本研究は、小豆島における醬（ひしお）の郷に着目し、離島空間における地域資源の活用状況や取組を明らかにし、醤油産業の観光資源化プロセスとその特徴について検討している。醬の郷は島全体の観光客が増える時期に繁忙期を迎え、瀬戸内芸術祭のある年は若年層の観光客が増える。現在の段階では、地方団体や各事業体が主な担い手となっている。醬の郷は産業遺産ではなく、現在進行形で発展していく観光資源であると捉えられている。しかし、登録文化財などは未開発であり、交通手段の不足や人手不足なども課題として残っている。

▼ Ts04 IR,16p.

Reference : 川添 航・劉 逸飛・坂本優紀・鈴木修斗・薄井 晴・中山 玲・付 凱林・王 倚竹・綾田泰之・杉谷大樹・松井圭介 (2023). 小豆島における宗教ツーリズムの変容と巡礼者の経験の特徴. 筑波大学人文地理学研究, 41, 39-54.

Key Words : 宗教ツーリズム, 巡礼, 遍路, 巡拝団体, 軽い宗教

Abstract : 本稿は、小豆島における宗教ツーリズムについて整理した論考である。地方部に位置する巡礼地を事例地域としに定め、巡礼の変容過程が精査された。受け入れ地域と訪問者の実情を踏まえた分析により、巡拝団体単位での巡礼が個人単位へ転換しているが、本稿ではその変容過程が解明されている。小豆島は八十八霊場の他にも豊富な観光資源を有しており、多くの観光客が訪れる。小豆島八十八霊場では、個人巡礼者の目的意識が多様化しており、主要な目的であった信仰・慰霊に加え、スピリチュアルな関心など新たな意味付けを見出せる。

▼ Ts05 IR,13p.

Reference : 薄井 晴・鈴木修斗・坂本優紀・川添 航・中山 玲・付 凱林・王 倚竹・劉 逸飛・綾田泰之・杉谷大樹・松井圭介 (2023). 香川県土庄町における子育て世帯のインフォーマル・サポートの受容—子育て世帯の居住歴と社会関係に着目して—. 筑波大学人文地理学研究, 41, 55-67.

Key Words : インフォーマル・サポート, 社会関係, ネットワークの中の子育て, 情緒的サポート, d 具的サポート, 香川県土庄町

Abstract : 本稿は、子育て支援をめぐる社会関係の重要性についての論考である。地方圏や離島地域での子育て世帯が受容するインフォーマル・サポートの実態は、安定性の観点から再考を要する。そこで既往研究の南西諸島から場を移し、小豆島の土庄町で社会的環境について聞き取り調査を行った。結果、既往研究で想定されていた親族や地域による豊富なサポート像が土庄町には当てはまらないことが判明した。特に島外出身者においては、島内在住者の送迎など道具的サポートが殆ど無いことに加え、依頼の際の関係性構築が難しく不利な立場にある。

▼ Ts06 IR,7p.

Reference : 鈴木修斗・薄井 晴・川添 航・坂本優紀・中山 玲・王 倚竹・付 凱林・劉 逸飛・綾田泰之・杉谷大樹・松井圭介 (2023). 香川県土庄町における地域おこし協力隊員のライフコースとキャリア. 筑波大学人文地理学研究, 41, 69-75.

Key Words : 地域おこし協力隊, ライフスタイル, キャリア, 小豆島, 土庄町

Abstract : 本研究は、香川県土庄町で活動している「地域おこし協力隊」を精査した論考である。この活動に参加している人の参加理由は様々で、元来土庄町に興味があったという人は多くない。自身の生き方や価値観の追及やライフスタイルを変化させることが彼らの主目的となっている。数多ある仕事の中から自身の目的や目標に近付けると考えて地域おこし協力隊での活動に加わった人びとが多い。土庄町の協力隊の募集が「ミッション型」「フリーミッション型」であったため、移住者のキャリアとマッチングしやすかったことも関係しているだろう。

「小豆島 オリーブ」で検索してヒットするもののうち、地理学に関連が深いと考えられる 4 ページ以上の文献を厳選のうえ掲出した。

▼ Ov01 Re,5p.

Reference : アクアネット編集部 (2010). アクアネットレポート 現地レポート 香川の「オリーブハマチ」ブランド化への手応えー香川県/オリーブハマチ生産者グループ 小豆島産のオリーブ葉で身質改善・県からのPRー. アクアネット, 13(1), 6-10.

Key Words : オリーブハマチ, 品質管理, 情報発信, ブランド化, モイストペレット, 庵治地区

Abstract : 地元の資源を活用した商品ブランド化の工夫を紹介した記事である。小豆島産オリーブの葉の粉末を混ぜた飼料モイストペレットを与えて育てた高松市庵治地区のオリーブハマチは、徹底したコスト計算と品質管理のもとで肥育されている。当初は香川県内を中心とした試食会などのイベントでスタートした知名度向上の情報発信戦略は、県の支援も得て徐々に活動範囲を拡大し、東京や大阪でのイベント開催も実施してブランド化に成功した。産地に近い道の駅「源平の里 むれ」では、オリーブハマチの「づけ井」が人気メニューとなっている。

▼ Ov02 Re,9p.

Reference : 板倉宏昭 (2018). 小豆島にみる離島ビジネスの挑戦ーオリーブ産業を中心としてー. 実践経営, 55, 75-83.

Key Words : 離島, 地域資源, 地域ブランド, 付加価値, 産学官連携, 地域価値連鎖

Abstract : 本論文では、離島という不利な位置にありながら、当地の気候に適合したオリーブ栽培が主題になっている。ただ、オリーブ栽培は一旦衰退を経験した。その後、多種の振興策による産学官連携が奏功し復活を遂げたが、そこには地域資源としてのオリーブのもとに各種の島内産業が集って地域価値連鎖の強化を図った取組がある。オリーブ起源の製品は、特産品を活用した地域ブランド化に成功し、加工を経て付加価値を高めた。オリーブ茶、オリーブはまち、オリーブ牛、オリーブ炭など島内だけに留まらない産業活性化に貢献している。

▼ Ov03 Re,8p.

Reference : 井上 繁 (2008). 合併後の地域を診る (9) 香川県小豆島町 オリーブを活用して. 地方財務, 654, 144-151.

Key Words : 平成の大合併, 財政力指数, 公債費比率, 小豆島オリーブ公園, 小豆島移住交流推進協議会

Abstract : 平成の大合併により内海町と池田町をもとに 2006 年誕生した小豆島町は、従前に比べて財政力指数や公債費比率が僅かながら向上した。オリーブ栽培試験地の跡で合併前に開園した小豆島オリーブ公園は、現在はオリーブ記念館やクアハウスも併設した道の駅となして島内有数の観光拠点となった。オリーブ栽培に関しては、島内の他の食品工業とのコラボも盛んで多様な商品が開発されている。町では I ターン移住者の獲得にも力を入れており、2007 年に小豆島移住交流推進協議会を発足させ、空き家バンクの運営や就業斡旋を行っている。

▼ Ov04 NDL,4p.

Reference : 神尾信治 (1950). 小豆島オリーブ樹栽培地を尋ねて (採薬行). 薬用植物と生薬, 3(1・2), 57-60.

Key Words : オリーブ樹試験地, 標本園, 隔年結果, 搾油機, 池田町

Abstract : 本論文はエッセイ調で書かれた、薬草専門家集団での小豆島訪島記録である。小豆島南海岸の内海町から池田町に入った一行の目には山麓部に展開する想像以上のオリーブ園が入ってくる。その後に訪問したオリーブ栽培試験地では標本園に入って様々な品種のオリーブを観察し、場長や係員から説明を聴く。第二次世界大戦後にオリーブ栽培地が着実に拡大していること、適切な剪定をしないと 1 年毎に収穫量が少ない隔年結果を招くことなど知る。搾油機で得られるオリーブ油は果実重量の 1 割前後であり、その希少性が分かると指摘した。

▼ Ov05 Re,7p.

Reference : 黒島慶子 (2012). 地域レポート 無限の可能性 小豆島オリーブ. 調査月報, 308, 8-14.

Key Words : 国際品評会, フロスオレイ, 手摘み, 搾油機, 助成制度, 小豆島オリーブ協会

Abstract : 本稿は、オリーブオイルソムリエの著者による小豆島オリーブの紹介記事である。決して経営規模が大きい小豆島のオリーブ栽培は、手摘みなどの人手をかけた丁寧な栽培で品質を磨き、イタリアで開催されるフロスオレイなどの国際品評会で最優秀賞に選ばれるなど知名度を上げた。高価な搾油機の導入には町や県からの助成制度を活用し、小豆島オリーブ協会のもとに生産者や加工業者が集い「100%使い切る」を旗印に食品や化粧品、飼料に至るまで多種多様な商品の開発に励み、島内や県内で数多くの特産品の創出に成功している。

▼ Ov06 Lb,9p.

Reference : 中川秀一 (2014). 蘇 (よみがえ) る「オリーブ」関連産業ー小豆島におけるオリーブ栽培の再生ー. 地理, 59(3), 24-32.

Key Words : 共同体意識, 地場産業, 連携活動, クラスター, 食料産業

Abstract : 本研究は、国内のオリーブ産業について小豆島を事例に地域に依拠するオリーブ産業のクラスターの発展の要素を明らかにすることを目的としている。調査の結果、「気候風土に適した素材特性があること」、「外部からの需要と基礎研

究サポート」,「産業間での問題共有」,「他の産業や関連諸機関と地域の問題を共有する」という 4 つの要素が重要な役割を果たしていること,また,「共存」をベースとした文化のもと,緩やかに柔軟性を持つ産業へ変化していることが明らかになった。

▼ Ov07 Re,12p.

Reference : ながさき経済編集部 (2018). 期待されるオリーブ栽培の地域への貢献 (4) 香川県小豆郡小豆島町 ながさき経済, **342**, 28-39

Key Words : 規制緩和, 行政主導, 6次産業化, イメージ戦略, 地域間競争, 通信販売

Abstract : 本稿は, 小豆島町 (旧・内海町地域) を対象としてオリーブ栽培を様々な観点から考察した分析レポートである。当地のオリーブ栽培は病害や転作によって一時は全盛時の 1/3 にまで減少したが, 新世紀に入ってから規制緩和と振興特区に指定されるなどの行政主導で息を吹き返した。近年は東洋オリーブや井上誠耕園を中心にして 6 次産業化も進んでおり, 栽培面積も全盛期に迫る勢いにある。他産地との地域間競争にも晒されているため, 病害対策や後期者問題を抱えながらも通信販売などの工夫を施して生存に向けた努力が重ねられている。

▼ Ov08 Re,4p.

Reference : 野村昌二 (2010). オリーブの島で暮らしたい—瀬戸内・小豆島に若者が集まる訳—。アエラ, **23**(45), 48-51.

Key Words : 過疎化, 高齢化, 小豆島移住・交流推進協議会, 空き家, 航路

Abstract : 週刊雑誌に掲載された記事で, そこには小豆島へ移住してきた 5 件の移住者の話が載っている。過疎化と高齢化に悩む党内の自治体は, 香川県とともに小豆島移住・交流推進協議会を立ち上げ, 空き家の斡旋などを始めた。航路が充実した小豆島への移住者は年齢も職業も多様で, 旅館従業員, オリーブ農園勤務, 小学校教員, オリーブ農園経営者, 素麺工場従業員と多彩な職に就いている。各人に共通して「決して収入は高くないが, ストレスが少ない島暮らしが気に入っている」「自然や人間関係が素晴らしい」という肯定的な評価がある。

▼ Ov09 Re,6p.

Reference : 細川 寛 (2001). 地域とともに オリーブと二十四の瞳の小豆島の紹介と当支店 (香川県信用組合土庄支店, 内海支店) の活動状況。信用組合, **48**(6), 62-67.

Key Words : 寒霞溪, 二十四の瞳映画村, オリーブ公園, 特産品, 香川県信用組合, 土庄支店, 内海支店

Abstract : 本稿は, 業界専門誌に掲載された歴史と風土, 観光スポット, 特産品などを記した地誌的な紀行文である。観光が主産業であるだけに, 自然の造形美がみられる寒霞溪, コンテンツツーリズムに関わる二十四の瞳映画村, 農業や食品工業と関連性の高いオリーブ公園などが列記され, 特産品では内海町の醤油を活用した佃煮, 長い伝統をもつ手延素麺, 六次産業的に注目できるオリーブ製品が説明されている。本稿の主役である香川県信用組合は, 小豆島に土庄支店と内海支店の 2 つがあり, 各々の管轄エリアで小豆島の経済活動を支え続けている。

▼ Ov10 Web,17p.

Reference : 松井恵麻 (2023). 地域社会に資するアートイベントとは何か。地理科学, **78**(1), 3-19.

Key Words : 地域社会, アートイベント, 妖怪アート, 地域活性化

Abstract : 本稿は, アートイベントの運営実態を把握し, 地域住民との関係性の解明を目的としている。その中で「妖怪アート」を展示するというスタイルを一例に挙げる。参加企業は, 元来オリーブを用いた化粧品などの製造・販売を担っていたが, アートを介して地域資源の再発見と観光振興に活用しようとする視点を加味し, 現在の体系にすることとなった。さらに妖怪アートを活用して人とのつながりの重視を図った。妖怪アートは一部の地域住民との衝突を生じたものの, 企業と地域住民は対話や会議を重ね, 住民合意のもと域活性化に成功した。

▼ Ov11 IR,11p.

Reference : 森重昌之 (2019). 香川県小豆島のオリーブを用いた土産物における資源利用の実態。阪南論集 人文自然科学編, **54**(2), 27-37.

Key Words : 土産物, 加工形態, 加工度合, イメージ利用

Abstract : 本研究では, 香川県小豆島のオリーブを利用した土産物が事例に取り上げられ, オリーブがいかなる形で土産物に利用されているかの実態把握を試みている。小豆島で製造・加工されている土産物かつ小豆島産オリーブを利用しているものは, 全体の 12% に過ぎないことが明らかとなった。一方, 加工度合いで分類すると, 加工度合いが低いと菓子や惣菜に利用され, 加工度合いが上がると化粧品やオイルに使われることが多い。イメージの利用では玩具や文房具が多種製造されており, 同時に製造加工が外部に依存する傾向を呈していた。

▼ Ov12 Web,7p.

Reference : 山田実加 (2021). 地域における産業と移住者に関する資料。研究紀要, **45**, 15-21.

Key Words : オリーブ産業, 産業従事者, 小豆島, 移住, 地場産業, アンケート調査

Abstract : 本研究は, 小豆島のオリーブ産業について, 地域内の各産業と移住者との関連から考察したものである。第一次産業に従事する人は全国的には0.8%であるが, 小豆島においては3.5%と上回り, 特にオリーブ事業は国内95%のシェアに及ぶ。そこでオリーブ産業の従事者に対し, なぜ移住を決めたのか等についてアンケート調査をした。移住を決めた理由は, 島内の企業, 生活環境に魅力を感じていることが多い。また移住してみた結果として地域はどうみえるかに対し, ポジティブ回答を寄せた人は76%で, ネガティブ回答は24%であった。

▼ Ov13 Web,8p.

Reference : 山田実加・徳丸宜穂・小竹暢隆 (2019). 日本の食品産業のクラスター研究—小豆島のオリーブ産業を事例に一. 生産管理, 26(1), 7-14.

Key Words : 共同体意識, 地場産業, 連携活動, クラスター, 食料産業

Abstract : 本論文は, 小豆島のオリーブ産業クラスターの発展要素を主題とした論考である。同産業の基盤は, ①気候風土に適した素材特性, ②外部需要と基礎研究面でのサポート, ③産業間での改善課題の共有, ④他の産業や関連機関との地域課題の共有という4つの要素が重要な役割を果たしている。さらに面積が限られる島の特性から産業領域を超えた地域内での連携と協力が強固で, そこから芽生えた共同体意識が, 地場産業で培われた知識をもとに専門性追求という価値連鎖を生じさせ, オリーブ産業の発展が小豆島全体の発展を誘発している。

▼ Ov14 Web,8p.

Reference : 山田実加・徳丸宜穂・小竹暢隆 (2021). 農業産地における事業システム形成—小豆島のオリーブ産業の事例を中心に—。生産管理, 28(1), 37-44.

Key Words : 産業集積, 産地形成, 長期的進化, 経営者の意識, アウトソーシング

Abstract : 本研究は, 農業産地発展に影響を与える要素について, 事業システムの視点から明らかにすることを目的とした論考である。産業集積内の組織の関係性が変化する時点において, 互いに顔が見える対象は各過程において刻々と変化し, それらが重ねられることで多種多様な意識が各々の経営者に醸成される。さらに, 長期継続的アウトソーシングは, 産地内の限られた資源を補う仕組みとして, ある一定期間継続的に機能する。ここで行われるアウトソーシングの対象は, 産地内から産地の境界を越える開放的な関係性へと変化するようになる。

▼ Ov15 Web,8p.

Reference : 山田実加・徳丸宜穂・小竹暢隆 (2021). 農業産地における協働と競争の仕組み—小豆島のオリーブ産業の事例を中心に—。生産管理, 28(2), 37-44.

Key Words : 産業集積, 事業システム, レジリエンス, 自立集積型の協調関係

Abstract : 農業産地内の競争の構造は, 他者による競争の調整から各組織が状況に応じて選択できる主体的な選択による競争の調整へと変化することで, 自然環境リスクへの対応としても機能する。また, 分業での協働の仕組みは地理的価値を創出して, 自立集積型の協調関係の構築が可能となり, 産地内の過剰な競争を回避できる。そして, あらゆる変化を取り込み柔軟に変化しつづける。新たな協働と競争の仕組みの創出過程は, 産地に属する組織のレジリエンス蓄積の役割を果たして, 更なる影響を与え合い, それが産地の継続させる原動力になる。

「小豆島 醤油」ならびに「小豆島 しょうゆ」で検索してヒットするもののうち, 地理学に関連が深いと考えられる4ページ以上の文献を厳選のうえ掲出した。

▼ Sy01 IR,16p.

Reference : 天野雅敏 (2014). 戦時期小豆島の丸金醤油株式会社の朝鮮進出について. 甲南経済学論集, 54(3・4), 1-16.

Key Words : 満洲醤油株式会社, 朝鮮丸金醤油株式会社, 運営権, 管理権

Abstract : 本研究は, 戦時期における丸金醤油株式会社の朝鮮進出について解明することを目的としている。丸金は, 1940年に満洲に満洲醤油株式会社を設立した。しかし, 工場建設は停滞し成果を上げるには至らなかった。そこで丸金は1942年に朝鮮南部の馬山に朝鮮丸金醤油株式会社を設立した。当初は順調に生産を進めたものの, 黒字経営まで運ばず敗戦を迎えた。敗戦後に現地人を交渉相手として工場売却を企図するも, 日本軍の撤退と米軍進駐のため交渉は頓挫した。その後, 米軍の承認する朝鮮人管理人に工場を譲渡することで敗戦処理を終えた。

▼ Sy02 Web,44p.

Reference : 児玉洋一 (1943). 近世小豆島の醤油醸造業. 高松高商論叢, 18(1・2), 85-128.

Key Words : 近世, 銘醸地, 大阪市場, 若狭屋半兵衛, 高梁文右衛門, 栄久社

Abstract : 本稿は小豆島醤油の商品化の礎が築かれた近世に焦点をあて、醤油醸造業の発展背景を史料分析により解明した論考である。中世起源といわれる小豆島醤油醸造が近世に銘醸地として名を上げ、大阪市場に販路拡大を図って成功するも代金の延滞などに苦しみ、打開策に苦労した歴史が綴られている。こうした環境のもと、後に協同組合へ発展する栄久社の萌芽となったのが大阪の豪商・若狭屋半兵衛と小豆島の高橋文右衛門との一種の専売契約である。このことにより、地元の良質な塩を活用した小豆島の醤油醸造業は後の発展基盤を整えた。

▼ Sy03 Web,6p.

Reference : 中上 貴也・中野 茂夫 (2022). 小豆島における醤油製造施設の推移と配置特性. 日本建築学会技術報告集, 28(68), 476-481.

Key Words : 配置特性, 生産過程, 一貫生産, 製麹協業, 生揚協業, 買取生産

Abstract : 小豆島における醤油醸造元の生産過程は、①一貫生産方式、②製麹協業方式、③生揚協業方式、④買取生産方式の 4 つに大別される。①の醸造施設では、各工程が企業内で分化し、大量生産に適した大規模工場が多い。②と③に分類される醸造施設は、限られた工程に特化した工場に改変することで生産の効率化を図って生存を果たしている。他方、④に分別される醸造施設は、最終工程の調味だけに特化したもので、工場の規模は総じて零細である。また、不要となった生産施設は、オリーブ加工等の工場になることで活路を見出していた。

▼ Sy04 Web,4p.

Reference : 彦坂伊太郎 (1925). 小豆島醤油業の経済的研究 (上). 日本醸造協会雑誌, 20(12), 56-59.

Key Words : 文政天保期, 生醤油組合, 経済界の不況, 醤油醸造所, 役割分担

Abstract : 小豆島の醤油は、江戸時代到大坂、堺、広島、高松などでの販売を試みた。文政天保期には、販売競争における抵抗力増強のため生醤油の組合を組織した。明治に至って小豆島の醤油は、全国の醤油生産の約六割を占めるほど重要な地位を獲得するに至った。大正 2 年と 3 年には、経済界の不況により小豆島の醤油業にも負の影響が生じている。この不況により、徐々に醤油醸造場は衰退を経験した。小豆島の醤油醸造業は、大小の醤油醸造場で合議が重ねられた。こうした合議の結果、各々の企業で役割分担が確立し、醤油業は立て直された。

▼ Sy05 Web,5p.

Reference : 彦坂伊太郎 (1925). 小豆島醤油業の経済的研究 (下). 日本醸造協会雑誌, 21(1), 69-73.

Key Words : 移入数量, 企業改革, 企業形態, 大正時代, 大阪市場

Abstract : 小豆島にある醤油醸造場は個人による中小零細経営が大多数である。小豆島内の同業者を以て一丸となり、大規模な企業となって市場を独占することは近い将来に実現するとは思えない。小豆島の醤油の最大の得意先は大阪市場の大阪府であり、他府県よりも移入量も消費も多い。しかし、大阪市場における香川県、兵庫県、愛知県、千葉県に移入醤油調査によれば、千葉県が大正 9 年以降に大躍進している。自然資源の独占、製造機械の統合、運輸管理のもと生産額を加減して現在に至ったが、更なる発展のためには企業改革が不可欠である。

▼ Sy06 Re,7p.

Reference : 福留奈美 (2021). 紀伊半島と小豆島のしょうゆづくり—木桶造りの伝統と変化—。醤油の研究と技術, 47(4), 262-268.

Key Words : 木桶仕込み, 湯浅, 廻船問屋, 手麹, 小豆島醤油協同組合, 天然醸造蔵

Abstract : 本稿は、紀州湯浅と小豆島の醤油醸造に焦点を当てた各々の特徴を探った複眼的な考察である。両者ともに木桶仕込みで廻船問屋との関係で発展した共通項があり、小豆島では西廻り航路の寄港地になっていたことが醤油醸造業の基盤となっている。手麹に拘る製法が主流となっており、温度調整をしない天然醸造蔵が今なお多く残る。醤油醸造の中心は小豆島町苗羽地区であるが、土庄町の醸造元も加盟している小豆島醤油協同組合では品質管理された原料醤油を醸造元に配給し、それに各々の蔵が手を加えて個性を出す製法も行われている。

▼ Sy07 Web,17p.

Reference : Sampaio, R. R., 天野 雅敏 (2012). 近代小豆島醤油製造業の発展と丸金醤油株式会社. 国民経済雑誌, 206(4), 1-17.

Key Words : 小豆島醤油醸造業, 後発醤油産地, 丸金醤油株式会社, 木下忠次郎, ④高等醤油

Abstract : 小豆島で市場向けの醤油生産が始まったのは 18 世紀末で、16 世紀以前に発展していた他産地と比べると後発産地として醤油製造業に参入することとなった。明治期、小豆島では、醤油醸造業の改善への取り組みがなされ、資本蓄積の低位性を克服するために株式会社制度が導入され、醸造規模の拡大が図られていた。特に丸金醤油株式会社はその中でも最大の造石高を占めていた。明治末期になると、取締役社長の木下忠次郎を中心に企業規模の拡大を図り近代的工場を建設し、良質な④高等醤油の浸透を企図したが、それは容易ではなかった。

▼ Sy08 Web,21p.

Reference : Sampaio, R. R., 天野雅敏 (2013). 近代小豆島醤油醸造業の発展と醤油市場—丸金醤油株式会社の事例を中心にして—. 国民経済雑誌, **207**(1), 59-79.

Key Words : 丸金醤油株式会社, ㊤高等醤油, 丸金醤油の国内販売, 丸金醤油の海外輸出, 濱野久吉商店

Abstract : 丸金醤油株式会社は、企業規模の拡大と㊤高等醤油の生産により高品質な醤油の生産と販売に注力した。しかし、その事業展開は容易に進まず、やむなく並醤油大樽の出荷に踏み切った。この並醤油を㊤高等醤油の取扱店に多く供給するという営業上の工夫もみられた。結果、㊤高等醤油の販売が回復に転じ、大阪に本社を置く濱野久吉商店を媒介にしてハワイやアメリカ本土へ販路拡大することにも成功した。日系人が多い地域は市場として魅力的であり、THE BEST MARUKIN SHOYU と称された同社製品は現地での浸透に成功した。